

東町漁協青壮年部のこれまでの活動とこれからの挑戦

～もっとふるさとの海を知ってほしい～

東町漁業協同組合 青壮年部 顧問 岩塚一也

1 地域と漁業概要

長島町は鹿児島県の最北端の町として薩摩半島の北西部に位置し、東シナ海、八代海、長島海峡等、四方を海に囲まれ、自然に恵まれた町です。長島本島、伊唐島、諸浦島、獅子島の有人島のほか大小 23 の島々が点在し、その一部は雲仙天草国立公園に指定されています。

長島町の人口はおよそ 1 万 2 千人で、就業人口の約 43 % が第一次産業に携わっており、島ミカンをはじめとする柑橘類や、赤土バレイショのほか地元産サツマイモで造った焼酎「島美人」が特産品となっています。

本町における漁業は、変化に富んだ海域を有し、まき網、棒受網、吾智網、刺網、一本釣りをはじめ採介藻漁業など様々な沿岸漁業が営まれています。

また、島や入り江が点在する複雑な地形を活かしブリやマダイなど魚類養殖業が営まれています。特にブリ養殖については、日本でも有数の産地で、ブランド名「鰯王」として国内はもとより世界各地へ出荷しています。また、ビタミンやミネラル等の栄養素を豊富に含んだヒトエグサも盛んに養殖され長島町の特産品となっています。平成 20 年度における東町漁協の組合員数は 683 名（正組合員 470 名、准組合員 213 名）で、魚類養殖業 150 名、青オサ養殖業 136 名、磯たて網漁業 176 名、たこつぼ漁業 98 名ほかとなっており、総水揚げ 15,870 トン・108 億円で県内でも屈指の漁協です。漁業種類毎の水揚げは、魚類養殖業が 12,609 トン・89 億円、青オサ養殖業が 102 トン・3.9 億円、磯たて網漁業が 65 トン・55 百万円、たこつぼ漁業が 61 トン・59 百万円等となっています。



図 1 長島町位置図

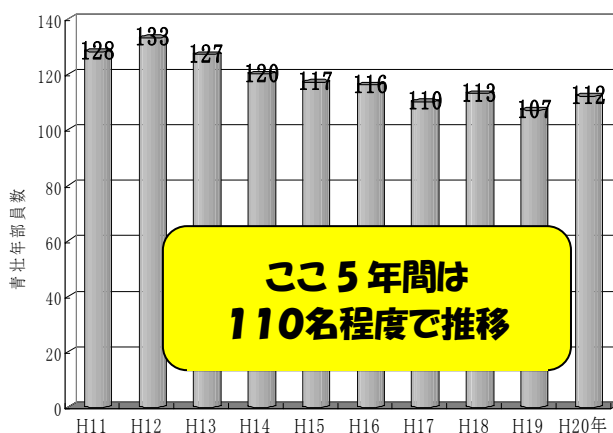


図 2 過去 10 年間における部員数の推移

2 青壮年部の概要

私たちの青壮年部は、部員相互の交流と親睦、漁業技術の向上を目的に、昭和53年に設立されました。現在、18歳から40歳までの対象者112名が加入しています。漁業種別では魚類養殖79人(70%)、海藻養殖および漁船漁業33人(30%)で、また年齢別構成は、25歳未満10名(9%)、25歳～30歳41名(36%)、31～35歳31名(28%)、35～40歳30名(27%)で、25歳未満の割合が少なくなっています。これは、高校・大学進学や就職で長島町を離れるためで、その後、Uターンをして漁業に就くものも多く、平成16年以降、部員数は110名程度で推移しています。青壮年部組織としては、地域別の支部組織と漁業種別の部会を有し、地区別には13支部が、漁業種別には魚類養殖部会と漁船漁業部会があり、それぞれテーマをもち活動しています。

3 海を守り育てる

青壮年部は豊かな海を守り育てるため、漁民の森育成、海岸清掃、稚魚・稚貝の放流、イカシバ投入などの活動に取り組んでいます。

平成17年から取り組んでいる「Fisherman's forest」漁民の森育成活動では、山岳信仰の聖地でもある行人岳にカエデやブナの木を植樹し、植えた木が育つように毎年草払いを行っています。漁民の森育成活動は5年目になりますが、植樹した木1本ずつに部員の子供の名をつけ、我子のように大事にしています。そのことで長く続けることができたのだと思っています。

また、別の重要な取り組みの一つとして、沿岸域のクリーンアップ運動があります。毎年海の日には全支部を上げて海岸清掃を行っています。

放流事業については、青壮年部が活動主体となり、マダイやヒラメ稚魚の放流を継続しています。子供たちにも水産資源を守る重要性を知ってほしいとの願いから、各地区の小学生にも参加してもらい放流を実施しています。

また、イカ資源の増大を図るためイカシバ投入を行っており、現在は全ての支部で実施するようになりました。



写真1 漁民の森育成



写真2 海岸清掃



写真3 放流活動



写真4 イカシバ設置

4 地域貢献活動と魚食普及

長島町内で開催される各種イベントに積極的に参加しています。毎年7月に開催されるサマーフェスティバル長島において「ブリのつかみ取り大会」を行っています。水槽の設置、ブリの運搬から大会当日の運営、参加者がつかまえたブリの活き締めからパック詰めまで行って喜ばれています。また、長島町の産業祭「長島フェスタ」では、養殖ブリが当るくじ引き大会を行い、お祭りを盛り上げています。

この他、地元の子供たちに町の基幹産業である養殖業を身近に感じてほしいとの思いから、調理実習等の出前事業も取り組んでおり、獅子島中学校では、平成20年度から県の委託を受け体験学習として養殖魚のさばき方や調理実習を実施しています。また、年末には町内の養護老人ホームへ鰯を贈呈する取組みも行っています。これらの地域貢献活動を通じ、魚食普及が図られればと考えています。



写真5 ブリつかみ取り大会



写真6 くじ引き大会



写真7 獅子島中学校の調理実習



写真8 養護老人ホームへの鰯贈呈

5 研修活動

青壮年部設立の目的であった漁業技術の向上はもとより、青年漁業者としての見聞を広げるため各種研修に積極的に参加しています。毎年1回、漁協や町からの支援を受け、先進地視察研修を行っています。先進地視察研修で得たいろいろな知識・情報は、研修成果として総会で報告発表することとなっており、このことで、参加者はみな熱心に研修を受けています。

また、町が主催する水産マイスター塾にも、積極的に参加し、鹿児島大学水産学部の講師の方々から講義を受けることで、大学レベルの専門知識を学ぶほか、海外研修にも参加し見聞を広げています。国内外での私たちのブリや水産物がどのような評価を受けているのかを身をもって実感することができ、大変有意義な研修となっています。今後も積極的に参加していきたいと考えています。



写真9 H20年度先進地視察研修
三重県



写真10 H20年マイスター塾 中国大蓮市

6 私の複合経営と青壮年部との関わり

私は、高校卒業後の昭和60年から家業の魚類養殖と小型定置網漁業に従事しています。経営の主体はブリ養殖ですが、時期に合わせ小型定置網漁業も操業し、アジ・タイを主体に水揚げしています。両親と私の3人の家族経営ですが、養殖ブリの出荷の際は、地域の方々と協力し合いながら作業しています。私の7年間の経営状況は、図3のとおりです。養殖ブリの出荷尾数は年間約12,000尾で、平成17年は魚病被害のため9,300尾と少なくなっています。一方、小型定置網漁業は年間50万円程度の水揚げがあり、魚類養殖と小型定置網漁業を組み合わせることにより、経営の安定化が図られています。

私は、漁業就業と同時に漁協青壮年部に入部し、積極的に活動に参加してきました。平成9年度から平成12年度までは役員を、平成13年度から平成17年度は部長を勤め、その

後 2 年間相談役として、現在は顧問として在籍しています。これらの活動の中で特に印象深いものとして、平成 18 年から全国海水養魚協会が開催している「魚類養殖の明日を考える若手意見交換会」に鹿児島県青壮年部代表のパネラーとして参加したことです。全国の生産地の若者と交流する中、東町漁協が日本屈指のブリ生産地として、その地位を維持していく責任の重さを痛感させられました。

しかし残念ながら、昨年 8 月、八代海で赤潮（シャトネラ アンティーカー）が発生し、養殖ブリ 121 万尾が斃死、被害額も 20 億 3 千万円にのぼり、これまでにない大きな被害となっていました。被害の程度は各養殖業者によって異なりますが、養殖業者全員が被害を受けるという過去に例を見ない厳しいものでした。

私の場合は、幸いなことに養殖ブリの 1 割程度が死ぬ被害で済んだものの、漁業経営に大きな影響が出ました。しかし小型定置網漁業の水揚げにより何とかカバーでき、漁業経営再建の見通しを立てることができました。今回の経験で、複合経営の大切さを改めて実感した次第です。

国・県・町をはじめ多くの人達から暖かな支援をいただきましたことを、この場を借りてお礼申し上げます。赤潮に負けない気概で、1 日も早い復興に向け取り組んでいきたいと考えています。

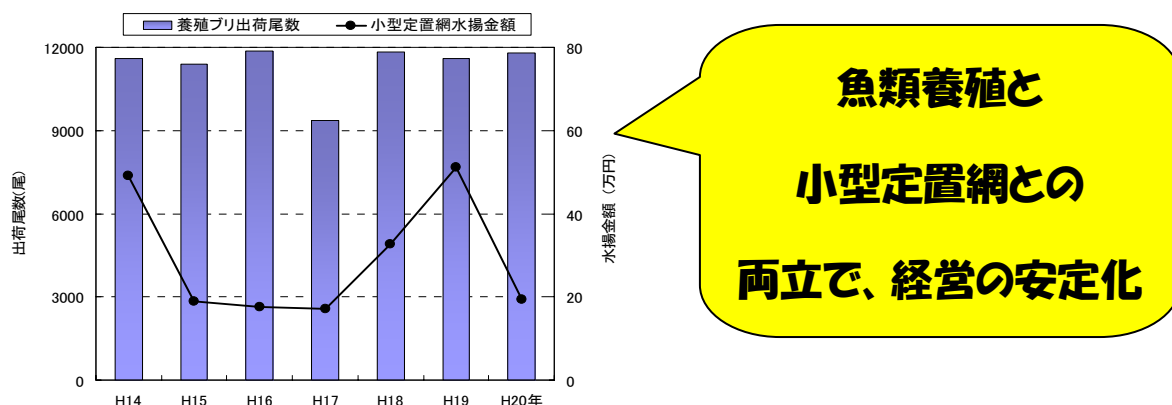


図 3 過去 7 年における養殖ブリ出荷尾数と小型定置網による水揚げ金額



写真 11 マコンブ養成試験



写真 12 カキ養成試験



写真 13 ヒジキ養殖

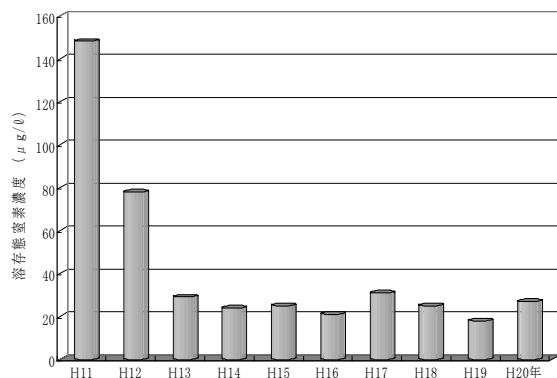


図4 東町漁協管内の魚類養殖場内における溶存態無機窒素濃度の平均値変化



写真14 出張お魚市場

7 これからの取組（エコ養殖の試み）

今回の赤潮で思ったことは、赤潮による魚類養殖の経営リスクを軽減するには、複合経営、複合養殖が必要だということです。色々なものを養殖し、そこで生産・排出される物質（エネルギー）を円滑に循環させることで、漁場環境を維持保全しながら、より効率的な養殖生産を実現するエコ養殖を進めていく必要があると考えています。

青壮年部では、鹿児島大学の提案を受け、共同で各種実証試験に取り組んでいます。一つはマコンブの養成試験です。魚類養殖により排出される残餌や排泄物が分解し出来る溶存性無機態チッソやリンをマコンブに吸収させ漁場の保全が図れないか実証するものです。12月下旬に沖出しした発芽体が、5月上旬には葉長2.5メートルまで生長し、天然稚魚が蟄集しアオリイカの産卵が確認されるなどの副次的効果もありました。もう一つは、カキの養成試験です。カキは餌をとるために大量の海水を濾過することから、カキを飼育し魚類養殖により排出される残餌や排泄物の浮遊懸濁物を吸収させる試みです。カキ1個は、1日当たり0.5トンの海水を濾過すると聞いています。これらはまだ試験・調査段階ですが、大いに期待でき、漁場保全に対する有効性が確認できれば、複合養殖、エコ養殖の一つとして取り込んでいきたいと考えています。

この他、獅子島の3集落では区画漁業権を取得し、ヒジキの養殖が取り組まれています。獅子島地区は東町漁協管内でも有数の規模で魚類養殖が行われており、これまでも赤潮による被害が発生し、漁場環境の保全に対する関心の強い地区です。マコンブと同様の理由からヒジキ養殖が取り組まれました。平成21年度は30kgの種苗から969kgの収穫がありましたが、まだまだ改良すべき点が多くあります。主体は漁業集落ですが、青壮年部獅子島支部も積極的に協力していきたいと考えています。

更に、新たな取り組みとして、長島特産の養殖ブリや鮮魚類を皆さんに知ってもらうために昨年度から「出張お魚市場」活動を漁船および養殖研究部会で行っています。慢性的な魚価安や消費低迷等の問題に直面しておりますが、まずは私たち生産者の顔を消費者の

方々に知ってもらい、魚種毎の食べ方や旬についてお伝え出来ればと思っています。

今回の赤潮により、東町漁協のブリ養殖は甚大な被害を受け、これから続く再建の道は長く厳しいものと思います。それでも長島の海は豊かで沿岸漁業や魚類養殖に最適の海であると信じています。ブリ養殖の再建に当たり、新たな取組みとして地域循環型の複合エコ養殖を取り入れ、より多様性をもった養殖経営を目指していきたいと考えています。